



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 中央アジア・オアシス研究の今後：堀直著『清代回疆社会経済史研究』の出版を記念して  |
| Author(s)        | 小沼, 孝博  |
| Citation         | 日本中央アジア学会報, 18, 61-62   |
| Issue Date       | 2022-07-31  |
| DOI              | 10.14943/jacas.18.61  |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/91610">http://hdl.handle.net/2115/91610</a> |
| Type             | article   |
| File Information | JB18_013onuma.pdf   |



[Instructions for use](#)

## 中央アジア・オアシス研究の今後

—— 堀直著『清代回疆社会経済史研究』の出版を記念して ——

小沼 孝博

本パネルは、故堀直氏（1946–2020）の遺稿集『清代回疆社会経済史研究』（大阪大学出版会、2022年1月）の出版を記念し、堀氏の研究の特徴や学術的意義をふまえながら、中央アジア・オアシス研究の今後を展望する意図のもとに企画された。

堀氏は、中央アジア史研究において大きな足跡を残され、また1999年に開催された第1回のまつぎきワークショップにも参加し、以来本学会の創設と運営に尽力された。その半世紀にわたる研究活動のなかで堀氏は、18–19世紀の清朝統治下で「回疆」と称された、中央アジア東部のタリム盆地一帯（現新疆南部）のオアシス社会の実態を解き明かすべく、当地域の社会・経済関係に関わる根本的な事象——交通・交易・貨幣・都市・農村・耕地・水利・農作物など——を地道に、しかし極めて精緻・実証的に分析された。それらの業績から主要な論考18篇を選集して刊行したのが『清代回疆社会経済史研究』である。

本パネルでは最初に、編者として論集の刊行に携わった澤田稔が「堀直先生の経歴と業績」と題する報告をおこなった。堀氏が発表した学術論考は、(1)概論、(2)15–16世紀の中央アジア東部と明朝（①モグール・ウルス関係、②歴史地理関係）、(3)18–20世紀の中央アジア東部と清朝、の三つに大別できる。また、学部生時代からの積極的な学会・研究会活動への取り組みを紹介し、著者の研究歴を回顧した。

次に、同じく編者の一人である小沼孝博が論集の出版経緯と学術史上の意義を述べた。特異な政治・社会環境にあった清代回疆オアシスの歴史には、早い段階からアカデミックな関心が寄せられ、日本における中央アジア研究の分野でも大きなウェイトを占めてきた。そのなかで堀氏の研究は回疆オアシスの基層をなす社会・経済関係を解明し、その通時的・質的な変化や展開を世界史の流れや清朝統治の変遷とあわせて歴史的に位置づけることを目指すものであった。個々の知見や成果だけではなく、そのような研究の総体の体系的な把握を容易にすることが論集刊行の目的の一つである。また、使用される史料と分析手法の多彩さも当論集の学術的な意義として認められると指摘した。

続いて二人の報告者がそれぞれの観点から論評を試み、議論の深化・発展が今後見込まれ

る論点を抽出して研究の展望をおこなった。塩谷哲史「論評①：水利と文書研究の観点から」は、塩谷が専門とする中央アジア西部、就中アム河下流域（ホラズム地方）の水利・灌漑史に関する研究動向を整理し、そこから社会経済史の手薄さ、現地文書活用の不十分さ、及びミクロな社会像とグローバル・ヒストリーとを接続した議論の欠如といった現下の課題を析出させた。その意味において、オアシス社会の具体的な復原を目指した堀氏の研究手法や視点には、上記の課題を克服するための道筋が示されている。他方、建設兵団や人民公社の存在を念頭に、中国近現代における農業の「開発」と堀氏の議論はどのように結びつくのか、その妥当性も含めて考える必要があるとの提言をおこなった。

木村暁「論評②：オアシス都市研究の観点から」では、まず客観性と現地社会との共感を兼備する人文研究を求める堀氏の研究姿勢に触れた後、人類史研究の一環として実施されたそのオアシス都市研究が、都市の空間的構成や社会構造、都市と農村を包摂するオアシス共同体の生成と諸活動、特に経済の機能やメカニズムを実証的に解明する成果を残したと評した。今後の展望としては、周辺諸勢力との跨境的な社会経済関係を組み入れた総合的な地域史の構築、また近年進展が著しいロシア帝国の統治下におけるイスラーム法の運用実態に関する研究を意識しつつ、回疆における宗務者の役割や法的慣行の解明に取り組むべき課題として挙げた。さらに、中国領とロシア領におけるテュルク化の進捗・遷移（進行／退行）という新たな比較研究の可能性を提起した。

質疑応答と討論の時間は限られていたが、遊牧（民）という要素を組み込んだオアシス研究のあり方、また現代ウイグル族の文化・文芸研究における堀氏の貢献についてコメントがなされた。本パネルを通じて得られた各論点を無駄にしないためにも、清代回疆オアシス研究への新規参入者の登場を強く期待したい。

（東北学院大学文学部）